2. 研究開発の立場から見たISMRM 2023のトピックス

黒田 輝 東海大学情報理工学部情報科学科

2023年はMetro Toronto Convention Centreでの対面開催を中心とした大会で，参加者合計は5873人であった。このうち，現地参加者は5336人（91％），オンライン参加が537人（9％）という構成比であり，ISMRMもようやく新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のトンネルを抜けたようである。また，トロントでの開催は8年ぶり4度目で，2003年にトロントで最初に開催された時は，重症急性呼吸器症候群（SARS）によって開催が延期されたことが思い出される。このことも含め，会場のキツツキの像（図1）を見た時は，とても懐かしく感じた。

筆者も4年ぶりに現地参加し，久しぶりに旧知の友人・知人に会って，握手をして，話をした。新しい研究仲間もできた。国際会議の意義は，やはりこうして世界中の人々が物理的に一堂に会して直接会話することにあり，それが何よりもうれしく，かつ研究の発展のために重要なことなのだと改めて感じた。燃料費をはじめとした物価高騰と円安によって，航空便もホテルも4年前に比べて1.5～2倍ぐらいのコストになっており，学生を連れて旅をするのもなかなか大変（筆者は学生と一緒にトロント大学の寮に宿泊した）であったが，現地参加の価値には代え難いと感じた。

大会概要

本大会の大会長（Program Chair）はイタリアResearch Institute Eugenio Medea神経放射線科のDr. Nivedita Agarwalであった。演題数は5478件で，これは2019年大会の5068件を1割程度上回り，会員の皆が大会に戻ってきたことを実感した。発表形式として特筆すべきは，AMPC Selected AbstractおよびPreclinical，Machine Learningなどの特定領域のTraditional Posterが復活したことである。会場におけるTraditional Posterのエリアはやや閑散としていたが，以前より紙ポスターをどうするかという議論があり，今回は試験的にこのような試みをしたものと思われた。

研究・開発におけるトピックス

1. 全体の傾向

Plenary Sessionのテーマはその年の大会の傾向をある程度反映するので挙げてみると，月曜日がMoral & Ethical Issues in MRI Research，火曜日がMind the Gap：From Magnetic to Electrical & Other Physical Properties of Biologic Tissues，水曜日がPET-MR Today & Tomorrow：the Power of Fusion，木曜日がTailoring MRI to Local Needs：A Journey Around the Globeで，倫理・技術・多様性などに広く目が向けられた構成であった。特に，最終日である木曜日のセッションは，東南アジアやアフリカにおけるMRIの普及・教育状況を紹介するもので，多様性を重視するISMRMの姿勢が明確に出ていた。このことは，2026年大会が南アフリカ・ケープタウンで開催されることにも表れている。各named lectureは，Mansfield Lectureが“Beyond Diagnostics：MR Guides the Way”，NIBIB New Horizons Lectureは“Brain Tumor Imaging Biomarkers & AI：A Clinical Roadmap”，Ernst Lectureは“Celebrating the Convergence Science of Medical Imaging”で，interventional MR，AIなどをカバーしており，臨床・基礎あるいは適用領域などの観点からバランスの良さを感じた。教育セッションではClinical Focus Meeting（CFM）on Neuro MRI：Imaging the Fire in the Brainが強調され，ここは神経放射線科の大会長らしさが出ていた。

以下では，筆者が研究・開発の観点から重要と思われたトピックについて述べる。

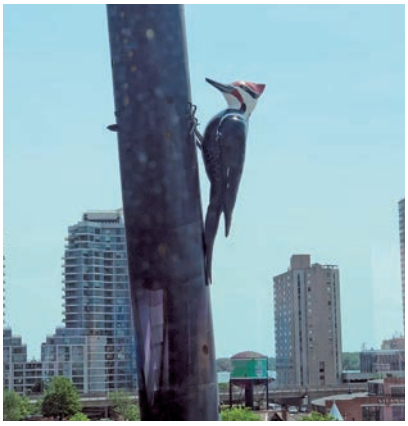

図1 Metro Toronto Convention Centre南側入り口横のキツツキの像
カナダの芸術家集団FASTWÜRMSによる1979年の作品。鉄柱は高さ30.5m，キツツキは体長4.9mという巨大なもの。

〈0913-8919/23/￥300/論文/JCOPY〉